

東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市の「復幸応援イベント」が今月1日、松阪市であり、ドキュメンタリー映画「あの街に桜が咲けば」(40分)が上映されました。同市は私も震災ボランティアで2011年8月、13年9月、昨年8月と3回訪れた地だけに、興味深く鑑賞しました。

旧松阪市と三雲、嬉野、飯南、飯高の旧4町の合併10周年記念事業。今年度の松阪市の新規採用職員が研修で被災地に入り、その体験を基にフレッシュな感覚でイベントを企画し、司会をしました。

第1部で、山中光茂市長は市民らから約200万円の寄付を集

映画「あの街に桜が咲けば」で植樹の協力を訴えるNPO法人「桜ライン311」の岡本翔馬代表(左)と佐藤一男副代表—いずれも小川光一監督提供



め、東北の特産品を約1500万円分仕入れ、販売したことを紹介。「陸前高田市から学ぶことは多い。市制施行10周年の日、痛みを共有する出発点としたい」とあいさつしました。来賓の久保田崇、陸前高田市副市長は「まだ仮設住宅に住む人は多い。復興は進んでいるが、完了には相当の月日を要する。我々の経験を松阪市の防災に役立てて」と警鐘を鳴らしました。新職員は昨夏の被災地研修で、商店街の看板を改修し、松阪産クレソンでパスタを作る支援をしたことなどを映像で報告しました。

第2部は、小川光一監督(27)が陸前高田市のNPO法人「桜ライン311」の活動を紹介した映画を上映。桜ラインとは2011年3月11日の震災で同市を襲った津波の最高到達点をつなぐように延長約170mにわたり桜を10段間隔で植樹する活動です。今後、津波が来る時、このラインより高い場所に避難するように後世の人々に伝承していくのが目的です。

岡本翔馬代表(31)は同市出身で、東京の建築業界にいたとき、震災で実家が全壊しました。家族

は無事でしたが、多くの知人が犠牲に。「残された側に何ができるか。前より、いい街を造らなさい」と、先に死んだ人に顔向けできない」と、11年5月に退職し、Uターン。同年10月、カキ養殖業者で仮設住宅自治会長の佐藤一男副代表(49)らと任意団体として、桜ライン311を結成しました。

課題は資金とマンパワー。完成には約1万7000本の桜が必要で、維持費を含め1本約1万円もするため、「毎月定額寄付制度」(1500円×3万円の4段階が任意の額)を呼び掛けています。植樹は全国からボランティアを募り、11年11月から植樹会を開催。13年秋に中学生や高校生が植えるなど延べ約2000人が参加し、昨年末現在、169カ所で769本が被災地を見守っています。

桜ライン311

一方、小川監督は東京出身で、大学を卒業後、アフリカなどの支援に従事。東日本大震災の後、知人の安否確認で被災地入りし、NPOの運営に携わりました。そこで岡本代表と出会い、「悲しみを悲しみて終わらせない姿を全国に伝えたい」と映画化。昨年3月から29都道府県の企業や小中学校

などで上映し、松阪市で115回目。延べ約1万2000人の観客に協力を呼び掛けました。



岩手県陸前高田市でボランティアが津波の最高到達点に桜を植える映画の1シーン

第3部のトークショーで、小川監督は「映画完成後も広島や御嶽山で災害が起きた。防災に役立ち、命が助かる人がいれば、作ったかがある」と力説。岡本代表も「桜ラインがこんな大きな動きになると思わなかった。植樹は15年、20年の長さで考えている。多くの人の参加を」と訴えました。

冊子にはこう記されています。「私たちは、悔しいんです。10層を超える津波の可能性が震災前から声高に叫ばれていれば!津波によって奪われた命は、もっと少なく済んだのではないかと?その思いが、今も頭を巡ります」

問い合わせは桜ライン311(0192・47・33399)。

【名張支局長・村瀬達男】